溶接で生まれたハクトウワシ、駐日米国大使館に寄贈

9ページ

令和8年10月23日金曜日に、昨年度の卒業生6名が在学中に製作したハクトウワシの作品を駐日米国大使館へ寄贈しました。

ハクトウワシはアメリカの国鳥です。一つひとつの部品を加工し、溶接によって形にしていく過程には、生徒たちが培ってきた技術とものづくりの情熱が込められています。

ものづくりには人と人、国と国をつなぐ力があります。学校で学んだ技術が国境を超えた交流に繋がることは、生徒達にとって大きな喜びであり、誇りです。

この度の貴重な機会に際し、温かい御支援と御尽力を賜りましたジョージ・グラス駐日米国大使、城内実大臣、深澤陽一代議士、田中健代議士をはじめ、関係者の皆様に心より感謝申し上げます。

本作品は、工業科の教科「課題研究」において製作しました。着想から設計、作図、製作に至るまで、すべての工程を生徒たち自身の力で成し遂げることができたのは、入学当初から前向きに技術の習得に励んできた成果です。生徒たちは高校生活の3年間を通じて、溶接アートコンクールへの出品をはじめ、溶接評価試験や溶接大会への挑戦、さまざまな工作機械の操作技術の習得など、真摯に鉄と向き合い、ものづくりの技術を磨いてきました。

そして、駐日米国大使館への寄贈が実現した背景には、生徒たちの可能性を見出し、その力を引き出した本校職員の熱意があります。また、作品に新たな価値を与え、世界へとつなげてくださった増田陽一校長、佐野和彦富士宮市議会議長兼同窓会長をはじめとする学校内外の関係者の皆様による多大なるご尽力がありました。

これからも静岡県立吉原工業高等学校は、ものづくりを通じて生徒達の技術と可能性を伸ばし、社会に貢献できる人材の育成に取り組んで参ります。

（指導教諭　川崎祐一郎）




E PLURIBUS UNUM






Presented in Commemoration of
Friendship between Japan and the United States of America
Donated by
Shizuoka Prefectural Yoshiwara Technical High School
Artists: Taku Kataoka, Yasuharu Kikuchi, Shoma Kobayashi,
Ukyo Shoji, Misa Nishiguchi, Emily Yumi Morishita
Instructor: Yuichiro Kawasaki
October 2026











次ページ　製作レポート☞

課題研究　1/1 スケール ハクトウワシの製作

製作メンバー

片岡大來 菊池悌春 小林翔馬 庄司羽享 西口美沙 森下エメリーユミ

目的

身に付けた溶接技術やものづくりの技術を使い、ハクトウワシの模型を製作し展示する。

使った道具

半自動溶接機 アーク溶接機 グラインダー 万力 ワイヤブラシ チップソー切断機 タガネ
やっとこ ハンマー やすり ペンチ シャーリング バイブロシャー 高速切断機　など

目次

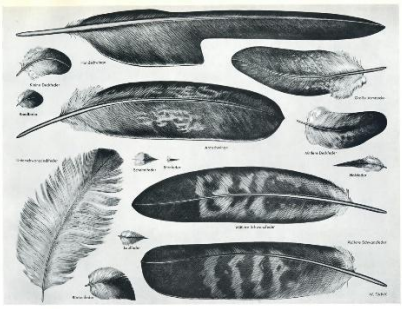
1.資料収集
2.寸法採り
3.パーツ製作
4.骨格組み立て
5.肉付け
6.羽根つけ
7.まとめ

1. 資料収集

ハクトウワシの骨格、肉付き、羽根の形状を調べる。



ハクトウワシと人との比較



各部の羽根



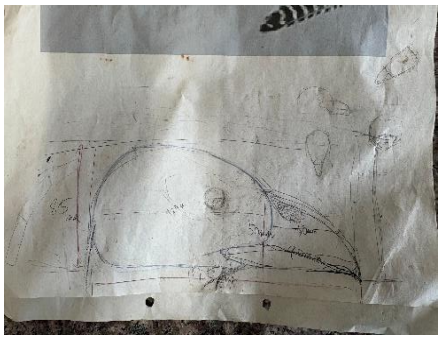
製作工程の考案

2.　寸法採り

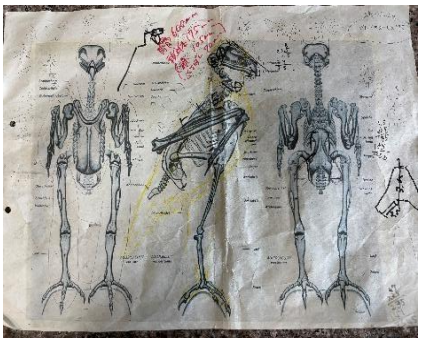
資料の寸法を測り、本物と同じサイズになるよう尺度を変えて実物大の寸法を割り出す。計算から、骨格図を 3.5 倍することが分かった。



骨格の採寸



頭部の設計図



関節間の寸法

3.　パーツ製作

メンバー内で役割分担し、頭部、背骨、四肢、羽根、爪、止まり木をそれぞれ製作する。



骨格の切り出し



羽根の切り出し



止まり木の溶接



尾羽根の取付け順序の確認



鍵爪の研削



頭部の板金加工

4.　骨格組み立て

止まり木に四肢、背骨、頭部の骨格を溶接する。かなりの重量を支えることが予想されるため、資格保持者(N-2F)が溶接した。互いの関節の距離が正しいため、ポージングは自由に行える。



組み立ての過程



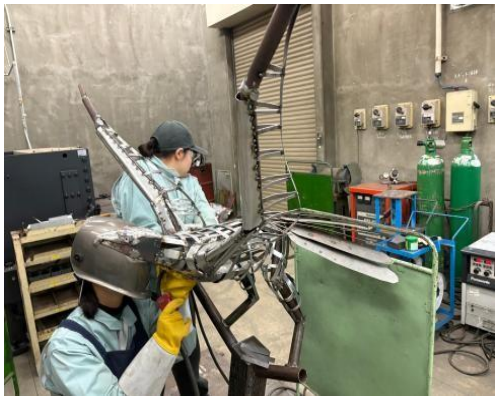
ポージング（飛び立つ姿）

5.　肉付け

組み立てた骨格に筋肉を模倣して、細くせん断した薄板を溶接する。



「鶏モモ」や「手羽先」がヒント



羽根を取り付けるリブの溶接

6.　羽根つけ

羽根を先端部から順に重ねるように溶接し、溶接個所を隠していく。



尾部・翼端部から羽根を溶接



3 年間で学んだ技術を活用



難しい溶接姿勢に対応



次第に増していく「鳥らしさ」

7.　まとめ

ハクトウワシの模型を作るにあたって、頭の丸みや、爪の鋭さ、羽根を一枚一枚つけるなど、今期の必要な作業が多かったが、妥協せずに製作したことで、とても出来栄えの良い作品になった。班員が一丸となり、細かいところまでこだわって再現したことで満足のいく仕上がりとなった。

実習を通して溶接技能だけでなく、計画性や協調性を高めるためのチームワークを学ぶことができた。課題研究では、技術や知識だけでなく、ハクトウワシを製作する一連の流れを自分たちで考えることができ、これから社会人として働いていくために大切なことを学ぶ良い経験となった。















製作メンバー



正面



側面



全体（前）



背面